



「自由」の楽しさと厳しさ



蒲池晴美

昭和電工(株)事業開発センター融合製品開発研究所
[210-0867] 川崎市川崎区扇町5-1
副所長, 博士(農学).
専門は酵素化学, タンパク質化学.
kamachi.harumi.xhzh@showadenko.com

www.sdk.co.jp/

実は、私は自分にとって重要な人(両親や伴侶、上司など)から、女性であることを理由に、何かを制限されたことが、あまりない。田舎育ちであるがゆえ「女が大学にいったら嫁の貰い手がない」という民話の世界のような言葉や、古い大学であるがゆえ「女子が博士課程に進むと教授に迷惑がかかる」という明治時代のようなセリフを聞く機会はあったが、一つの意見として聞き流してきた。もちろん、できないことは多くあるが、女性であるからではなく、私個人の能力不足に過ぎない。結婚はしているが子供はおらず、ほかの執筆者の方々のような、女性特有の人生経験も乏しい。女性であることは個性の一部であるが、女性らしい視点と言われるとどうにも自信がないという意味で、今回「男女共同参画の視点を含むメッセージ」への執筆機会をいただいた際にも戸惑いを感じたが、そのような人間も女性として大そう幸せな人生を送っているという事実が、何かの参考や励ましになれば幸いである。

「違いは個性、自然体でありたい」

今の自分の基礎となるこの価値観は、おもに大学/大学院の9年間で培われたように思う。私の母校である京都大学は、自由を尊重する学風であるが、自由とは、自分で考え、判断し、行動し、その結果を引き受けることを覚悟することであると教えてくれた。大学には学生を成功に導く責任はなく、当時はセクハラやパワハラといった言葉もなく、教員と密室で何時間議論しようが、厳しく叱責されて泣こうが、何日研究室で徹夜しようが誰も責められることなく、誰にでも公平な教育機会が用意されていた。大学院で所属させていただいた研究室は、留学生や他大学からの転入生、企業からの研究生など、さまざまな立場や国籍、年齢、性別が入り混じり、垣根なく議論しあえる環境であった。このような環境で過ごした9年間で、違いを個性として受け入れ、自分自身も自然体でありたいと考えられるようになった。

知人友人の大学教員の話を知っていると、現在の大学/大学院は国際化も進み、社会人学生も増えているようで、多くの個性を知るには良い環境だと思う。ただ一点、とくにセクハラの観点で女子学生の教育機会

が制限されているらしいことは、少し残念を感じる。居室をガラス張りにしてオープン性を担保する、女性教員を増やすなど大学でも手が打たれているようだが、女子学生自らが過剰に性別を意識せず、教員に議論を求めるなどの行動を取る必要があると思う。

「そのキャリアは、自分が希望したのですか？」

昨年まで採用担当をしていた私が、学生さんや若手社員から受けた、典型的な質問の一つである。大学で博士課程を終え、民間企業に就職し、研究開発職に就いたのち、新卒採用をやっている、という私の経歴が、かなり奇異なものに見えたのかもしれない。おそらくは社会が、計画性をもつことを教育するためであろうが、未確定で不安定な状態を、以前にも増して嫌う傾向があると感じる。私は、こと技術系のキャリアについては、長期的には柔軟に考えることが重要だと考えている。自分自身、入社当時は会社人生を研究開発で全うすることを希望していたが、長いスパンで見れば、その時々役割を果たそうと努めてきたらこうなった、という今の経歴が、結構自分に合っているように思うし、振り返ればなにごとにも自分の糧になる学びがあった。

「女性は家族を養う責任がなくもいいね」

今でもこの主旨の言葉をときどき聞くことがある。発言者が社会的制約から、希望とは異なる状況に耐えていることをあらわしているが、別の見方をすると、この価値観から男性はキャリア喪失を避けやすい、とも言える。仕事は大なり小なり嫌なこともストレスもあるが、途中で投げ出すと経験値が上がらない。ライフイベントで、キャリアアップのスピードを落とす状況が生じることもある。その中で女性には、男性以上に「かくあらねばならぬ」という社会的制約が少なく、おそらく今後働き方改革が進もうが、相対的には自由度が高い。ゆえに迷い、悩むことになるが、与えられた自由をどう使うかは自分しだいであるから、自由の楽しさと厳しさを味わいつつ、自分のことは自分で決め、人のせいにならないことが、悔いのない人生を送るコツであるようだ、というのが、現時点での私の結論である。